群教セ	G 10 - 01
	平 15 .213 集

互いに協力しようとする心情を育てる道徳指導の工夫

── 学校行事「子どもまつり」と関連させて ──

特別研修員　　篠原　知洋

《研究の概要》

本研究は、道徳の時間を学校行事と関連させて、互いに協力しようとする心情を育てる道徳指導の工夫について、実践的に研究したものである。具体的には、道徳１で個々のよさを学級内で互いに認め合う学習を行う。学校行事「子どもまつり」の体験活動と関連させて道徳２で協力することのよさや大切さに気づく学習を行い、道徳３でよりよい学級にするために互いに支え合い協力しようとする心情を高める学習を中心に実践を行った。

【キーワード：　道徳　　小学校　　協力　　学校行事　　体験活動】

Ⅰ　主題設定の理由

本研究では、道徳の時間を地域と連携して行う学校行事と関連させて、互いに協力しようとする心情【小学校中学年４－（４）】を育てる道徳指導の工夫を実践していくものである。私たちは、集団生活の中で生きており、それを支えているのは、互いに相手を認め、協力し合い、学び合いながら共に高め合おうとする相互信頼関係である。学校は集団生活そのものであり、友達一人一人の個性を尊重し、互いに協力しようとする心情を育むことはきわめて重要である。学校生活では、自分たちの学級以外の他学級・異学年の関わりの場面も多くみられる。そのような場面で、互いを信頼し仲よく協力することは、社会に適応できる習慣や態度を身に付ける基礎となり、豊かな人間性を培う礎になると考える。この時期の児童には、他学級や異学年の児童とも仲良く協力していくことの重要性に気付かせることが大切である。自分と立場や考えが異なる他者と関わる機会や場を数多く経験することによって、相手の人格を尊重する心や相手の立場や気持ちになって物事を考え、行動しようとする態度が養われていくと考える。

本学級（小学４年生、男子 10 名　女子 11 名　計 21 名）の児童は、誰とでも仲良くしようという気持ちが強い子どもが多く、学級全体としても非常に仲がよく、男女の隔てなく休み時間に遊んでいたりと、男女の協力もできる。調べ活動などで、調べる手だてが分からなく困っている子がいると、そっと声をかけてあげられる児童も数人いる。しかし「協力」という道徳的価値から考えると、「協力することは良いことだ」という意識に留まっていることも多く見られる。気の知れた学級の友達同士で協力する姿は見られるが、他学級や異学年など関わりが少なく、よく知らない児童と協力しようとする姿はあまり見られない。

そこで本研究では、クラスや学年の枠を超え、他学級や異学年、身近な地域の人々と協力することができる学校行事「子どもまつり」と道徳の授業の関連を図った一連の授業を意図的に展開していくことで、互いに協力しようとする心情をもった児童の育成に迫れるのではないかと考えた。まず、道徳の授業で学級内の友達の互いの個性を認め合う活動を通して、子どもまつりに向けて準備が始まる時期に「まつりの中で自分たちは何ができるのか」について話し合い、自分の行動を振り返りながら学級での協力について考える。次に、子どもまつり後に、子どもまつりの当日の自分たちの活動を振り返り、お客や保護者などのインタビューを効果的に用いることで、自分たちが考え行動してきたことが「子どもまつり」を成功させるための力になっていることに気づかせる。そして、他の学級や団の友達と協力することが、子どもまつり

に不可欠であったことに気付き、協力することの大切さや喜びを実感させる。さらに、子どもまつりで学んだことを基に、一人一人が互いの気持ちを知り、励まし合い支え合う活動を取り入れた道徳の授業から、児童は学級をよりよくするために、仲間と協力しようとする心情が高まると考える。以上のような考えで、本主題を設定した。

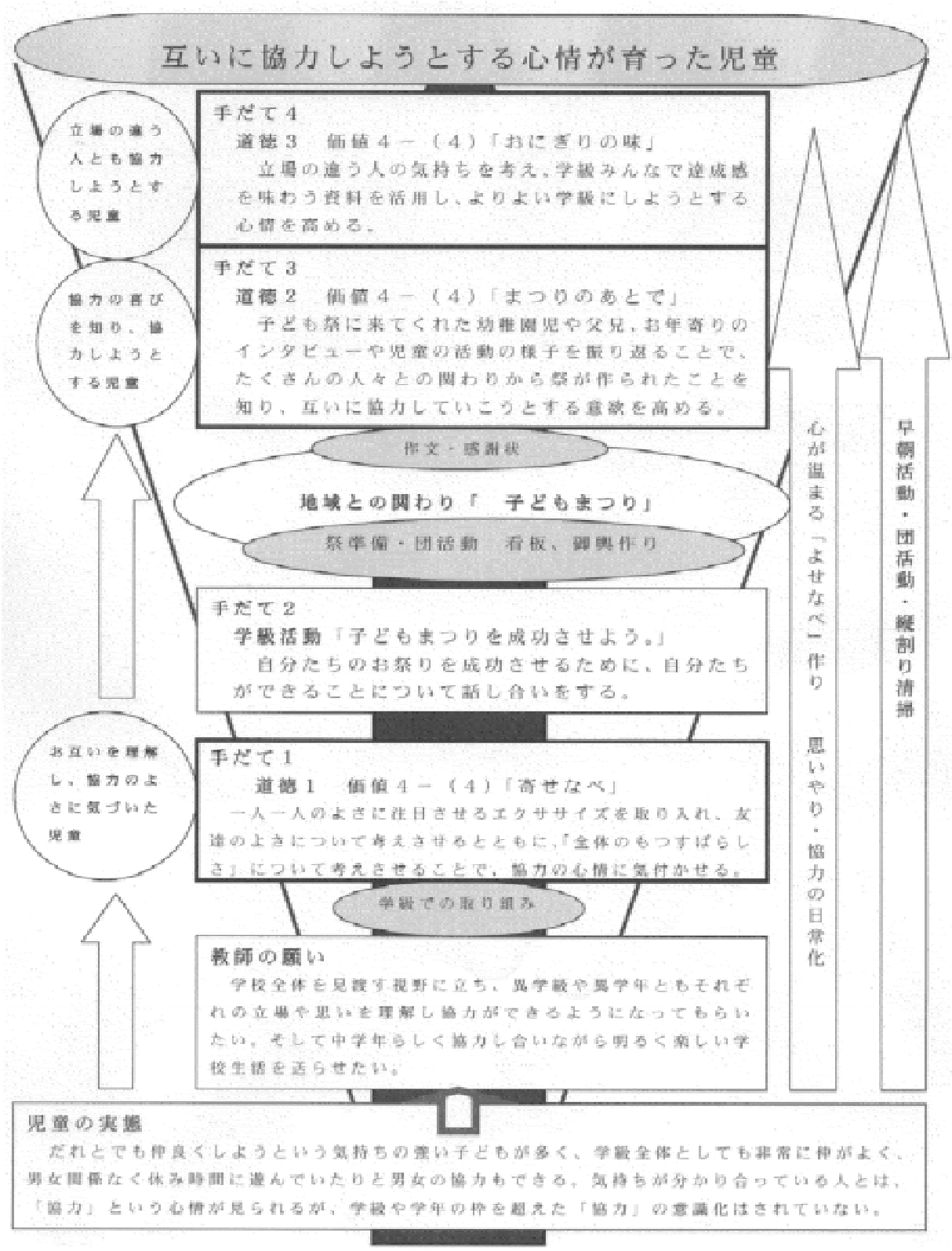


図1　全体構想図

Ⅱ　研究のねらい

道徳「協力し、よりよい学級をつくる」［協力４－（４）］において、道徳の時間を学校行事「子どもまつり」と関連させていくことを通して、互いに協力しようとする心情が育つことを実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

１　道徳１【価値項目　中学年４－（４）】において、読み物資料「寄せなべ」を用い、信頼関係は友達のよさや個性をよく理解することで生まれることについて知る。そしてそれぞれの個性を生かしながら互いに協力することがよりよい学級づくりにつながることに気付くことにより、学級の友達と協力していこうという心情が育つであろう。

２　学級活動「子どもまつりを成功させよう」において、「まつりが楽しい理由」について考え、自分たちのまつりを成功させるヒントに気づき、たくさんの人に来てもらい、喜んでもらえるような内容を話し合う活動を通して、団や他学級・地域の人々と協力する大切さに気づくであろう。

３　道徳２【価値項目　中学年４－（４）】において、子どもまつりの活動をその時の心情を中心に振り返ったり、来てくれた人の感想やインタビューを聞いたりすることで、まつりが成功した理由に気付き、協力したことの喜びを味わうことができるであろう。

４　道徳３【価値項目　中学年４－（４）】において、読み物資料「おにぎりの味」を用い、乙武さんを一緒に山登りに連れて行きたいというクラスの友達の思いや頂上で食べたおにぎりの味が忘れられないという乙武さんの気持ちを考えていくことで、人それぞれのよさを生かして協力していこうとする心情を育てることができるであろう。また、自分の弱さや困っていることに対して、学級の友達から励ましのコメントをもらったり、友達にコメントを書いたりする活動を通して、みんなで支え合い協力しようとする心情が高まるであろう。

Ⅳ　研究の内容

1　基本的な考え方

(1)　互いに協力しようとする心情をもっている児童とは

ア　学級の友達や自分のことをよく知り、学級で協力しようとする心情をもった児童

周りにいる友達一人一人のよさについてもう一度、よく考えてみようとする気持ち、自分自身のよさを友達に教えてもらい、新たな自分のよさを素直に受け入れようとする気持ちをもち、学級の友達と協力するよさに気づいている。

イ　仲間と協力することの大切さに気づき、協力の喜びを知っている児童

「子どもまつり」という学校行事を成功させるために、自分たちのとるべき言動について話し合い、実践していく中で集団としての達成感や充実感を味わったり、来てくれた人の感想を聞いて協力したことに喜びを感じている。

ウ　学級の友達の気持ちを考えて、支え合っていこうとする心情をもっている児童

学級においては、友達の中にも様々な思いの人がいることを知り、みんなで声を掛け合い、支え合って楽しい学級にしていこうという気持ちや立場を理解してクラスのみんなで互いに

協力していこうという気持ちをもっている。
の３つの姿であるととらえた。

(3)　学校行事「子どもまつり」との関連

学校行事「子どもまつり」は、総合的な学習の時間の発表や児童が栽培・収穫した米や野菜などを使ってだんごやポップコーンなどを作る模擬店や、各団ごとに工夫を凝らした御神輿、遊び屋などを通して、保護者や地域の方とともに盛り上げ、作りあげるおまつりである。

総合的な学習の時間の発表の場面では、学級を離れ、同じ課題の子とのグループ活動の中で自分の意見と友達の意見をすりあわせながら発表準備を行うことで協力の大切さを実感できる。団活動での遊び屋、御輿作りでは、異学年との児童の関わりの中で、相手の気持ちや立場を考えた行動が必要とされる。上級生をお手伝いをしようとする心情や下級生を手助けしてあげようとする心情がもてるようにしていきたい。子どもまつりの後には、来てくれたボランティアの方や保護者、幼稚園児、お年寄りのインタビューや子どもたちの活動の様子をビデオや写真で振り返る中で、お互いの立場を考えながら協力についての思いをまとめていく。こうした活動から、互いに協力しようとする道徳的心情が育つと考える。

2　実践の概要および結果と考察

(1)　学級の友達や自分のことを知り、学級で協力しようとする心情をもつことができたか。

ア　実践の概要

道徳１【価値項目　中学年４－（４）】では、読み物資料「よせなべ」を用いた。「よせなべは、どうしておいしいのだろう。」「よせなべって、なんだか学級によく似ているなぁ。」という主人公の気持ちを中心に話し合い、友達から教えてもらったそれぞれの個性「いい味」を集め、学級のよせなべを作り、これからどんな学級にしていきたいかを話し合った。

イ　結果と考察

自作資料「よせなべ」は内容が短く、児童には理解しやすい内容にした。「よせなべがおいしい理由は」の発問には、「いろいろな物が入っているから」「味が混ざっているから」という意見が多かった。「どんなところが学級と似ているのだろう。」の主発問では、「いろいろな子が力を合わせている。」「それぞれの子がいい味を出している。」「それぞれの個性が、うまく交じりあっている。」という意見が大半を占め、それぞれ個性を認める内容が多く出された。エクササイズで行った友達の「いい味カード」は、学級の友達全員に自分が書いたカードを手渡しする形態をとった。カードは事前に配布しておき、１週間前から友達のよさ探しを個々の児童にさせておいた。カードを記入する場面では、カードを隠しながら書く姿が多く見られ、「自分だけが知っている友達のよさ」ととらえ、秘密にしたいという心情が見てとれた。このことから、学級の一人一人をよく知ろうとしたことが分かる。また、友達からカードを受け取り、読んでいる時の表情は、どの子もとてもうれしそうな表情であった。友達から自分のよい面を教えてもらうことは、書いてくれた友達の思いや自分自身のことを改めて考えることができたようだ。「これからどんな学級にしていきたいか」の終末の発問には、「これからも仲間はずれのない仲の良いクラス」「みんなで協力するクラス」「だれとでもなかよくするクラス」「もっと仲良くなれそうな感じがする。」という「学級がまとまっていきたい」（協力）とする回答を９割以上の児童が書いていた。事前の「助け合い・

資料１　個々のよさを生かした「よせなべ」

協力」アンケートにおいて、「今まで友達と協力したことはありますか」の質問に「ない」と回答していたＡ男が、「これからどんなクラスにしていきたいか」の発問に、資料２のように回答している。友達とうまく関わることができないＡ男が、周りの友達から自分のよさを教えてもらったことで、学級の友達とよりよく関わろうとすることが分かる。

資料２　Ａ男のワークシート

個性がみんな違うから、みんなの個性を生かして、仲のよいクラスにしていきたい。

これらのことから、学級の友達や自分のことをよく知り学級で協力しようとする心情をもつことができたといえる。

(2)　仲間と協力することの大切さに気付くことできたか。

ア　実践の概要

学級活動では「子どもまつりを成功させよう」という議題で話合いを行った。学級から離れ他学級や同じ団の異学年との活動が主となるため、それぞれの児童が自分の立場を考えて具体的にどのように行動することがまつり全体の成功につながるかについて意見を出し合った。

イ　結果と考察

話合いは「どうして子どもまつりが楽しいのか」から始めた。「たくさんの人が来るから」という意見が出されたところから「自分たちもお客さんも楽しいおまつりにするには」という点にしぼって話合いを進めた。「みんなで協力しなければできない。」という意見が出され、ここから広げて、具体的な協力の場面として「当日までの準備の仕方」や「当日の行動」について意見を出し合った。児童からは「総合学習の発表が堂々とできるよう頑張る。」「模擬店の看板作りを協力してやる。」「６年生にやることを聞いて進んでやる。」「他の学級の発表をよく聞く。」「お客さんにあいさつをする。」などの意見が出された。実際の活動の振り返りカードには、「同じ班の人全員が発表できるような台本を作った。」「看板作りの時、絵の上手な子が絵を描いたり、字がうまい子が字を書いたりした。どちらでもない人は色ぬりをした。」（資料３参照）「来てくれた人にたくさんあいさつをしたり、トイレのスリッパをそろえたりした。」など、様々な場面で、周りの人とかかわるの中で、協力しようとする内容をほとんどの児童が書いていた。

資料３　看板作り

これらの発言や活動の様子から、一人一人がまつりを成功させるために他者との関わりの中で協力することの大切さに気付くことができたといえる。

(3)　仲間と協力することの喜びを感じることができたか。

ア　実践の概要

道徳２では、子どもまつりの場面写真を用いて、その場面での心情を児童に問いながら進めた。まず、自分たちの活動を振り返り、どんな気持ちで活動していたのか意見を出し合った。続いて、おまつりに来てくれた人々（保護者、お年寄り、幼稚園児）のインタビューした内容を聞き、自分たちの活動がどうお客さんたちの目に映ったのかを知り、多くの人がおまつりに関わり協力してきたことに気付き、協力する意義について話し合った。終末には、学校生活の中でこれからも協力していくには、一人一人どう行動したらよいか考えた。

イ　結果と考察

まつりの準備をすすめる場面や発表の準備を進める場面などでの心情を問う場面では、「看板の色塗りを失敗したけど、みんなで直してうれしかった。」「全員が発表できるようにしてよかった。」など学級活動で話し合った内容が多く出されたことは、手だて２が生かされてい

ると考えられる。価値に気づく場面では、保護者やお年寄り、幼稚園児の写真やインタビューカードを用いた。ボランティアのお母さんの「子どもたちが頑張っているんだから、私もできることを協力しよう。」という内容のコメントや幼稚園児の「小学校は楽しそう。早く小学校に来たい。」というコメントを読み聞かせた。どの児童もはっと驚いたような表情からうれしそうなよい表情に変わった。「自分たちの頑張りをほめてもらえたみたい。」と感想に書いている児童もいた。学校外で普段関わりが少ない人の感想を聞かせることは子供たちには新鮮であり、効果的であったといえる。その後の主発問「子どもまつりが成功したひみつはなんだろう。」には、「一人一人が自分のやることをいっしょうけんめいやって、みんなで力を合わせたから。」「全校の子が協力したから。」「お父さんやお母さんも力をかしてくれたから。」と「みんなで力を合わせた。」という内容を全員が答えていたことから、みんなで協力してきたことを児童が感じ取ったことが分かる。

授業の後半では、学校生活の中で協力する場面を想起させて、自分を振り返る学習活動を行った。協力する場面では「勉強」「運動」「登校」「掃除」などがあげられ、一人一人がどんな場面でどう行動していきたいかを考え、カードに記入し、「中央小協力よせなべ」を作成した。「掃除の時、自分の場所が終わったら、ちがうところを手伝う。」「登校班におくれないよう気をつける。」など今までの自分を振り返り、一人一人が協力する場面や内容を具体的に意識した内容を書くことができた。資料４のように、授業後の児童は、学級の枠にとらわれない団の友達とも協力したことが楽しいおまつりになったことに気付いた内容や、資料５のように、テーマごとに他学級の児童と編成した総合の学習の発表班の友達と協力してがんばった経験から、全校縦割りの掃除の班の人とも協力していくことが学校生活をより楽しくすることにつながると考えた内容の記述も見られた。

資料４　児童の感想文

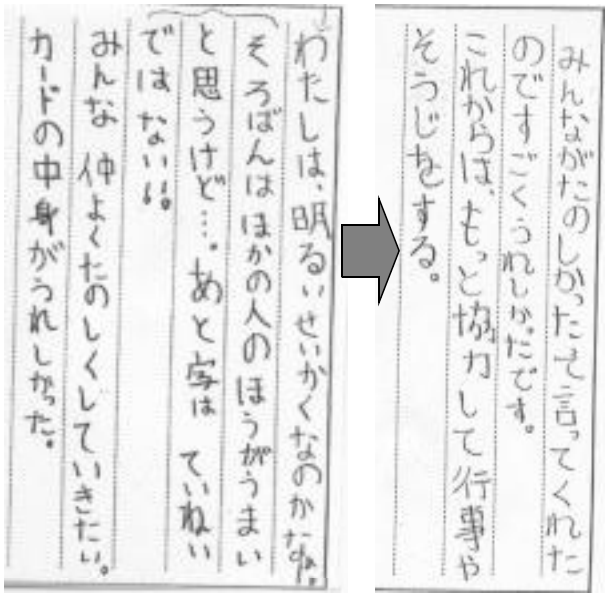
子どもまつりは楽しかった。もう一度やりたいくらい。じゅんびは大変だったけど、みんなでやっているうちに楽しくなった。

資料５　児童の感想文

発表をみんなと協力してがんばった。そうじを班のみんなでしたりすれば、学校がもっと楽しくなると思う。

「うまくいかないところもあったけど、自分たちで考えて協力してよかった。」と感想を書いていた児童に代表されるように、教師に指示されたことをみんなでやるのではなく、「自分たちで話し合いながら活動を進めたことに喜びを感じた」というを内容を約４割の児童が感想に書いていた。資料６からは、穏やかで自分を前面に出すことが少ない抽出児Ａ子の心情の変化が、ワークシートの記述内容から読み取ることができる。道徳１の授業で「みんな仲よくたのしくしていきたい。」と意欲を高め、子どもまつりの発表本番では、一緒に発表する友達が欠席したが、友達のセリフまで覚えられるくらいみんなで練習したのでうまく発表できたと聞き取りに答えていた。子どもまつり後の道徳２では、家の人や友達から「楽しかった。」と言われたことで協力した喜びを実感し、「これからは、もっと協力して行事やそうじをする。」と自ら意志を決定していることが分かる。これらの記述や発言から、自分たちの活動を振り返る活動を通して、仲間と

資料６　Ａ子のワークシート



協力する喜びを感じることができたといえる。

(4)　周りにいる人の気持ちを考えて、協力していこうとする心情をもつことができたか。

ア　実践の概要

道徳３では、授業前半は、資料「おにぎりの味」を用いた。車いす生活の主人公の乙武さんが学級のみんなに誘われ、無理だと思っていた山登りに挑戦する。学級の友達や先生の協力を得て山頂に着いた時のオトちゃんの気持ちや山登りの時のチームワークについて話し合う。その後、事前に行ったアンケート「(>_<)ヘルプカード」（自分が苦手なことや気になっていることなどを書いたアンケート）を用いて、内容は違うが、友達も自分と同じような気持ちであることを知る。後半では、自分の「(>_<)ヘルプカード」に学級の友達全員が書いてくれた温かいコメントを読み、学級のみんなに手紙を書いた。

イ　結果と考察

導入では、これまで作ってきた二つの「よせなべ」を提示し授業を振り返った。「いい味カードは大切にもっている。」「登校班におくれないようにしている。」などの意見が出された。資料に入り、手足が不自由で車いす生活を送るオトちゃんと一緒に山登りをしたいという学級の友達の意見に対して、「野球やサッカーだって一緒にやってきたんだから。山登りもやりたい。」「オトちゃんはクラスの一員だから。」というオトちゃんの学級の児童の気持ちと同じような意見が多く出された。チームワークを発揮して山を登る場面を想起させるために実際に車いすを用いて、友達が持ち味を生かして協力する疑似体験を取り入れ主発問へつなげた。「山頂に着いたオトちゃんの気持ちは、どんな気持ちだっただろう」の主発問には、「みんなに悪いなあ。でもありがとう。」「めいわくをかけてごめんね。本当にありがとう。みんなと一緒に登れてうれしい。」という友達の立場や気持ちを考えての意見が多く出された。後半の「(>_<)ヘルプカード」を読む場面では、児童が大事そうに封筒からカードを取り出し、学級のみんなからのコメントをじっくり読み返していた。自分の思いを学級の友達が知って、自分のために温かいコメントを書いてくれたことに、「みんなありがとう。苦手なことができるようになるような気がする。」と感想を記述したＢ男に理由を聞くと、「友達が自分のことをおうえんしてくれているのがよく分かったから、がんばろうと思った。」と答えていた。このことから、みんなのコメントに支えられて頑張ろうとする意欲が増したことが分かる。またＢ男はコメントを書いている時の気持ちを、「友達も困ったりしているんだなと思った。少しでもはげましてあげようと思った。」とワークシートに記述していた。この記述より友達の気持ちを知って、力になってあげたいというＢ男の思いを感じ取ることができる。その他にも「自分のことをみんなが考えてくれて、うれしかった。」など、友達が自分のことを考えてくれたことを喜ぶ内容を多くの児童が書いていた。また、「友達の困っていることを知って、もっと仲良くなれる気がした。」「自分だけじゃなくて、友達も苦手なこともあるんだなあ。自分のはげましの言葉で元気になってくれればいいなあ。」というように友達の気持ちを知り、力になってあげたいという気持ちを感想として挙げている児童も多くいた。これら相互の関わり合いは、協力の姿そのものであるととらえられる。資料７は、終末で書いた「学級のみんなへの手紙」の内容を整理したものである。道徳１の授業時のワークシートでは、「協力したい」「仲良くなれそうだ」（前記）という記述だったが「協力できるクラスにしよう。」「明るく仲のいいクラスにしよう。」というように記述に変化が見られる。この変化は、自分一人でなく、

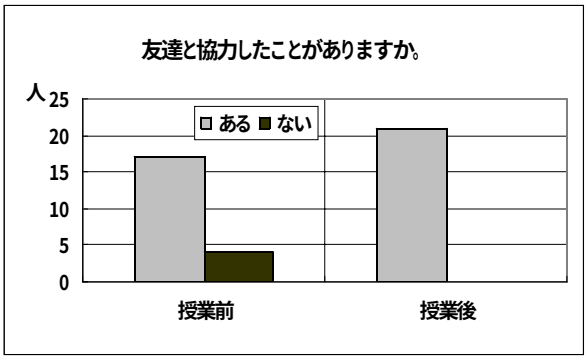
資料７　「みんなへの手紙の内容」

○おうえんしてくれて（はげましてくれて）ありがとう。	13 人
○コメントがうれしかった。	10 人
○協力できるクラスにしよう。	6 人
○明るく仲のいいクラスにしよう。	4 人
○苦手なこともがんばりたい。	3 人
○みんなのコメントを生かしたい。	2 人

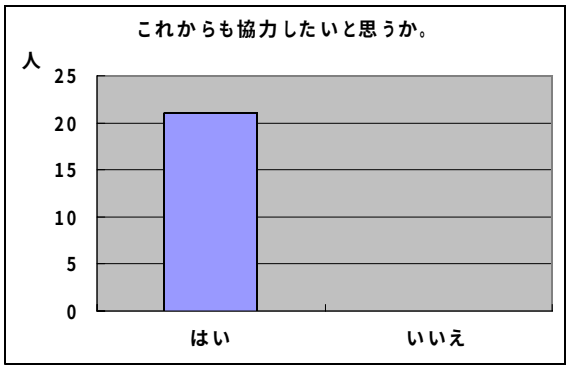
学級のみんなでそうしようとする意欲の高まりの表れである。

これらのことから、周りにいる人の気持を考えて、協力していこうとする心情をもつことができたといえる。グラフ１、２は、授業前と授業後の児童のアンケート結果をグラフ化したものである。授業前は協力したことがないと回答していた児童に授業後、聞き取りを行うと「協力することの意味が分からなかった。」と一人が答え、もう一人は「子どもまつりの時や掃除の時、協力できた。」と答えていた。また、これからの自分の行動について、学級児童全員に聞くと「これからも協力したい。」と全員が答えていた。理由では、「一人じゃできないことができるから。」「協力した方が、何でも楽しい。」「友達が増えるから。」という内容が挙げられ、協力することの意味やよさに気づき、意欲が高まったといえる。

グラフ１



グラフ２



Ⅴ　研究のまとめと今後の課題

1　研究のまとめ

○　道徳１で自分自身や他者をよく知るために行った、学級の友達のよさを教え合う活動は，友達を改めて見直し、よく知ろうとする心情を高めることに有効であった。また、友達から自分のよさを教えてもらうことが、学級への存続感につながり、友達と協力しようとする心情に結び付いた。

○　学級活動で、「子どもまつりを成功させるには」という議題で話合い活動を行ったことは、自分たちの学級以外の人とも協力することの大切さに気付くことにつながるとともに、、学級を離れても、一人一人がその場の人と協力して物事を行おうという学級全体の意志決定の場になり、意欲を高める上で効果的であった。

○　道徳２においては、子どもまつりには多くの人の協力があったことに気付かせる場面で来てくれた人のインタビューを用いたことは、まつり当日には気が付かなかった周りの人の子どもたちを支えようとする思いをとらえさせる上で有効であった。また、児童の頑張りをたたえる内容のメッセージは、まつりを成功させた喜びを自然と引き出すことができた。

○　道徳３では友達の思いを知って力になるコメントを書いてあげたり、自分の思いにみんなからもらったコメントを読んだりする活動は、自分だけでなく学級のみんなも同じように困ったり、苦手に思っていることに気が付くことができた。コメントを書いたり、コメントをもらう活動を通して、みんなで支え合い協力しようとする心情を高めることができた。

2　今後の課題

体験と関連させた道徳の授業の中で高めた心情を、何気ない日々の生活の中で生かしていけるよう、今後も定期的に自己の行動を振り返ったり、友達の言動を賞賛し合ったりする活動を継続して取り入れていきたい。